

わたしの原風景

11

飯野和好

いいのかずよし／絵本作家



原風景

野上（現・長瀬）町立第二小学校校門を出て、国道を左へ少し歩き脇道へ。国道とJR秩父線のガード下を右へくぐり抜けると、荒川上流沿いの細道に出る。左へ少し行くと「うどん屋」という文房具店（駄菓子やアイスキャンディ、奥のテーブルでとろろなどでも食べさせる）があり、また「荒木屋」という酒、醤油等を商っている店がある。その斜め向かいに「かまや」という乾物屋があり、そこから黒い大きな吊り橋（現在はコンクリート）を渡ると我が郷村大字岩田に入る。その吊り橋（白鳥橋）から下の清流を見るのが好きだった。夏などは大小の魚が流れの中にキラキラと白銀の腹を見せていた。大きな岩が連なるちよつと上に、地元の人だけが渡れる「むかで橋」という、丸太と荒縄で作っただけの小さな橋が見えた。丸太を結んだ縄の切れ端が、ちよつとむかでの足の様に見えたのであろう。橋を渡って真つすぐ農道を行き、たまに母の実家（農家）に寄り道したり、また同級生の家（道光寺）に寄って、本堂の縁側に座り漫画本を読んだり、ランドセルを背負ってぶらぶら帰る。少し行くと左側に「正ちゃんち」という駄菓子屋があり（学校帰りは買い食いをしてはいけない）、その前に大きな樫の木があり根元からこんこんと涼やかな泉が湧いている。石で囲みひしゃくを置き、通りがかりの人が喉を潤す絶好の水場になっていた。進むと右手は山が迫ってくる。左手は下郷の里が見渡せる。また進むと道脇に（沢のたもとに）古い山神様の祠があり、土人形などが飾ってありちよつと怖い。いつも学校の行き帰りに、どうしても挨拶をして通る。そこを過ぎると、人家も絶え、いよいよ山道峠道だ。山の気配の中、よく一人芝居をして帰った。ある時は探偵ごっこ。ある時はチャンバラごっこ。一人で何役もやって空想、妄想にふけりつつ帰るのが好きだった。その峠道からまたさらにジグザグに坂を上ると三軒の集落があり、我が家はその一番奥の農家。段々畑で親や祖父が働いている。牛や豚、鶏が鳴いている。山の匂いが強い。ほっとするのが好きだった。